利休



株勅使河原プロダクション＋松竹映像株＋伊藤忠商事株＋株博報堂…提携作品

松竹株式会社…配給

監督＝勅使河原 宏

原作＝野上彌生子「秀吉と利休」（中央公論社）より

脚本＝赤瀬川原平・勅使河原 宏／音楽＝武満 徹／衣装デザイン＝ワダエミ

撮影＝森田富士郎／美術＝西岡善信・重田重盛

後援＝表千家・裏千家・武者小路千家

協力＝草月会

三國連太郎・三田佳子・松本幸四郎・中村吉右衛門・岸田今日子・山崎 努



解説

戦国乱世の時代を経て、やがてもたらされた安土桃山時代。この時代は、遠くヨーロッパで興ったルネッサンスにも似て、それまでとは異質で新しい文化が横溢した時であった。そしてまた、時の権力者織田信長や豊臣秀吉の庇護の下で〝外来〟に触れ、日本が燃え盛った時代であったとも言える。なかでも千利休によって体系化されたと言われる〝茶の湯〟は、明日をも知れぬ時代に〝茶〟を通じて精神の世界へと導き人間性をとりもどすいわば芸術であった。京都・山崎にたった二畳のわびの極致『待庵』を作り、また一方では秀吉の命により督の限りを尽くした『黄金の茶室』を作り出すといった利休のスケールの大きな創造力と権力者に対峙するその姿勢は、彼の死後四百年を経た今日もなお我々に感動を与えずにおかない。

この日本のルネッサンス人とも言うべき利休は、どのように生き、どのように死んでいったのか。

この映画は、絢爛たる桃山文化を限りなく精緻に再現しながら茶聖・利休の鮮烈な生涯をドラマティックに描く作品である。

原作は野上彌生子の永遠のベストセラー「秀吉と利休」。権力者秀吉と求道者・利休の蜜月と葛藤を描く不朽の名作である。

監督には、勅使河原宏。二十五年前「砂の女」で若き映像作家としてカンヌ映画祭審査員特別賞、その後前衛芸術家として、またいけばなの草月流第二代家元として創作活動に身を置き、世界的に幅広く活躍している彼が今回、17年ぶりに復帰して映画を手がける。

脚本は、芥川賞作家であり画家である赤瀬川原平。初めての映画脚本に挑み、勅使河原監督との二年わたる推敲ののち完成に到った。

――織田信長の茶頭として仕えた利休は、その後天下を平定した秀吉の茶頭となる。秀吉と利休二人の愛と憎しみは、秀長・家康・三成そして妻りきなどかれらを取り巻く人々によって反響し増幅されながら、やがて破局へとむかっていく――。

この作品の製作にあたっては日本を代表する芸術スタッフが集まった。

衣装デザインには「乱」でアカデミー賞を受賞したワダエミがあたり、二百着を超える絢爛豪華な桃山衣装をデザインした。また、音楽にはこれまで数々の音楽賞を受賞、世界的に有名な武満徹、そして美術には映画美術の第一人者西岡善信と最高の映画製作陣である。

キャストには、千利休に名優・三國連太郎。秀吉に山崎努。利休の妻りきにトップ女優・三田佳子のほか信長に松本幸四郎、家康に中村吉右衛門、石田三成に坂東八十助、忠興に中村橋之助と歌舞伎界からもスターが出演。また、秀長に田村亮、北政所に岸田今日子のほか茶々には世界のトップモデル・山口小夜子が顔を揃えるなど、これ以上ないほど多彩なキャスティングである。またこの作品の撮影に際して、やきものでは長次郎楽茶碗、黄瀬戸茶碗など桃山時代の一級美術品が数多く使われたほか、歴史家の監修の下で聚楽第、京都御所、黄金の茶室、淀城など当時の忠実なセットが再現されたのも大きな話題である。

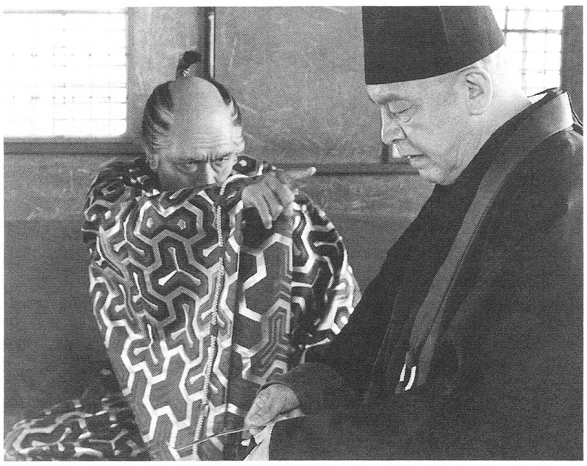
映画「利休」は、文字通り日本映画史にエポックをつくる作品である。



利休

勅使河原宏 監督作品

RIKYU



千　利休……三國連太郎
りき……三田佳子
織田信長……松本幸四郎
徳川家康……中村吉右衛門
大和大納言秀長……田村　亮
北政所……岸田今日子
大政所……北林谷栄
茶々……山口小夜子
お亀……藤田芳子（新人）
石田三成……坂東八十助
古田織部……嵐　圭史
細川忠興……中村橋之助
古溪和尚……財津一郎
鳥飼彌兵衛……観世栄夫
ちか……江波杏子
山上宗二……井川比佐志
豊臣秀吉……山崎　努

勅使河原プロダクション
松竹映像株式会社
伊藤忠商事株式会社　提携作品
株式会社博報堂
松竹株式会社　配給

製作総指揮……奥山　融
製作顧問……松井隆治
奥本篤志
企画……勅使河原　宏
製作……山内静夫
峰村永夫
渡邊一夫
製作補……前　吉祐
森江　宏
野村紀子
プロデューサー……上村　力
原作……野上彌生子
「秀吉と利休」より
（中央公論社刊）
脚本……赤瀬川原平
勅使河原　宏
撮影……森田富士郎
美術……西岡善信
重田重盛
衣装デザイン……ワダエミ
音楽……武満　徹
後援……表千家
裏千家
武者小路千家
協力……草月会

■監督の言葉　勅使河原　宏



千利休にひかれるようになって随分になる。茶の湯というと、何か鬱陶しい思い付きまとい、その頃は利休にも馴染めないものがあったのだが、十五年前、越前で焼きものを始めるようになってから桃山の茶陶を知ったのがきっかけで、俄然利休に対する認識を改めるようになった。

桃山の陶芸は、自由奔放、強靱にして繊細、人の心をこよなく豊にしてくれる魅力に溢れたものだ。それは焼きものの常識をうち破って新鮮であった。中国でもない、朝鮮でもない、南蛮でもない。それらの影響が微妙に響き合い、融け合いながら、数寄者の理想をあまねく表現に至らしめた稀に見る革命的な創造であった。桃山時代の茶碗、水指、花生など、今日に伝わる名品にはそれを証明する瑞瑞しい輝きが今だに健在で、芸術の普遍性を誇っている。

また利休の作といわれる京都山崎の茶室「待庵」に正座するならば、わずか二畳の空間が、われわれに幽遠というものを教えてくれる。

利休は一点にとどまる人ではなかった。常に時代を透視し、「物」を通じて精神世界へ導引していく方法を見事に完成させたのであった。建築、露地、道具、焼きもの、美術を総合的に捉えて、劇的な演出を可能にしたのである。

「茶の湯は御政道なり」といわれた時代、信長・秀吉の茶頭を務め、諸大名の統合に大いに力を発揮したその秘密は、彼が芸術至上主義者であるよりも、茶の湯を通じて芸術運動を志向したからに他ならない。

私は、ルネッサンス人・利休が果たした役割を、もう一度じっくりと見直すことによって、人間世界における文化の重要性を考えてみたいのである。